

中野重治全集

第三卷

中野重治全集

筑摩書房

中野重治全集第三卷

一九七七年六月二十四日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 井上達三

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話 〇三例七六五一(代表)

振替 東京六—四—一二三

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社鈴木製本所

装釘 柄折久美子

第三卷 目次

五勺の酒

後記

著者うしろ書 戦後最初の奇妙な十年間

解題

五勺の酒

五勺の酒

太鼓

おどる男

軍樂

柳のたなばた

夜と日の暮れ

吉野さん

よごれた汽車

アンケート断片

写しもの

樟脳と新かな

第三班長と木島一等兵

角力取ろうの国

その身につきまとう

三

元

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

焼酎とファシズム

二〇七

男いそこ

三三

米配給所は残るか

二二七

秋の一夜

二五四

広重

二八五

司書の死

二九八

空白

三二〇

公正への誘惑

三三五

湯屋と温泉

三三九

荒れた屋敷

三四五

親との関係

三六二

橋

三七〇

ある五十台の男

三七八

孫とおばば

三八六

指輪

四〇四

軒さき

四二三

萩のもんかきや

ヒサとマツ

五
勺
の
酒

五勺の酒

会えなかつたのは残念だがそれでよかつたか知れぬとも思う。会えば書かぬことになつただろう。会つて話したのでは話が外れて行つたろうと思う。このごろ部分的にモロクしてそういう傾向が強くなつた。久しぶりで会つたときの空気は古い知合いに強くひびく。字でかけば幾分でも外れが防げようと思う。とかく書いただけは独立するといふものだ。

何から書いていいか、書いても書きつくせぬ、話しても話しきれぬといった具合だ。しまいのところへ「この項つづく」と入れるつもりだが、忘れてぬかしてもそのつもりで読んでほしい。未練みれんがましいが初めをお願いしておく。

未練、未練。まったく僕は未練がましくなつた。何にたいする未練か。万事万端べた一面の未練だ。家族の顔、見おろす生徒の顔、わが半生、何もかも未練だらけだ。老醜らうしうという言葉があつてわかつたつもりでいたが、どの辺から老醜がはじまるか考えてみたことはなかつた。未練が老醜のはじまりでないだらうか。半生でなく三分の二生だ。もつと五分の四生だ。この三分の二生、五分の四生をふりかえて、残りの三分の一生、五分の一生に未練が出る。「十七歳、フランスが目の前にぶらさがつて……」ぶらさがつてはもうおらぬこと、そういう、返せぬ過去への未練でない。将来への、未来への未練だ。行住坐臥、霧のようにのぼつてくる未練にむせむせ、未練を感じだした年齢から、これからの年齢を円筒のようにのぞきこんで感じる精神のよろめきだ。君は知らないが、僕はむかし新人会へはいろいろとしたことがあつた。しかしはいらなかつた。警察署長というおやじの職業

が取次ぎの学生を逡巡^{しゅんじゆん}させたのだ。彼は拒絶するかわりに僕をさせた。あからさまでなかったが僕はさびしく身をひいた。それから僕は教師になり、生徒にいい評判をとり、校長になり、いまや追放か、でないかというところへきた。新人会幹事はまちがつていただろう。しかし僕はなぜ、さびしい思いなどを抱^だいて教師になつただろう。さびしい思い、馬鹿め……僕は地だんだを踏んであと十五年かそこの残りを考える。

僕は実際のところ、僕らの少青年時代の親たちや教師や校長があつたようにはありたくないのだ。少年たちを理解し、忠言をあたえ、出て行く彼らを窓から心で手を振つて見送るというようなのがいやなのだ。這つても彼らといつしよに行きたい。むしろ彼らを鼓舞激励したい、彼らをみちびきたいのだ。教師になつた僕はベスタロッチだのフレーベルだのルソーだのを読んだ。アメリカの教育法、ソ連の教育法から、中江藤樹、山鹿素行、松下村塾などいうものまで読んだ。そして最後に残つたのがコロレンコの小説の某という家庭教師だつた。小説の名も忘れ、コロレンコでなくてゲルツェンだつたかも知れぬ。とかくそれはロシャへやつてきた渡りもののドイツ人青年家庭教師だつた。ロシャ貴族特有の半アジア的空氣のなかで、身分の低い若いドイツ人が一心に子供を教えて、子供がまたなつく。馬鹿にされながら、居候^{いそうろう}あつかいされながら、子供を、持つてきたヨーロッパで教育して、師弟は学友になり、この師弟・学友関係がもうひとつ高い段階へのぼろうとすると或る朝教師が逃亡してしまう。私は君を私の能力の限界まで教育しました。これ以上君に教えることは私にありません。私はほかへ出かけましょう。こう置き手紙をして手ぶらで逃亡してしまう。どんなにその美しさが僕を打つただろう。おれの持つてゐるものを少年たちに与えてしまおう。そしたら逃亡だ。こうしてこの青年は、教師になつた僕がたえずうしろ姿として行く手に見てきたものとなつた。生徒たちによかつた僕の評判には、この逃亡ドイツ青年の影響が実にあつたろうと今思う。

そこでどうかという、なま若い僕がそんな氣でつとめてきたことを僕は今あわれむが、持つてゐるものを与えられたかどうか、まわりがそれを許したか許さなかつたかとなればそれどころかだ。自分全部を与えることが

許されぬとわかつた僕は五分の四の自分を与えようとした。それが許されぬとわかつたときは二分の一を与えようとした。それが駄目とわかつたときは三分の一、つぎは四分の一、つぎは五分の一を与えようとした。最後には何分の一でなくただ僕自身の僕による何かを与えようとした。僕は慄然とする。五分の四を与えたと思つたとき他の五分の一を僕が与えなかつたろうか。二分の一を与えたと思つたとき他の二分の一を、三分の一を与えたと思つたとき他の三分の二を与えなかつたろうか。何分の一でなくて、せめてただ何かを与えようとしたとき全部を他で与えなかつただろうか。すくなくとも僕は——戦争、戦争——すべてが、他で与えられるのを見送つてきた。すべてを与えて逃亡する、その逆が僕に道として与えられた。僕はただ、征伐・出征の征を「ゆく」とよむのは間違いだといつて生徒たちに教えられただけだ。（英語はなくなつて僕は国語をとときき見ていた。）また応召という言葉がはやつて「応召される」という受け身の形が生徒の作文に出てきたとき、それは間違いで応召「する」でなければならぬ、受け身なら「召集」されるだといつて主張できただけだ。そしてそれさえ、僕の説を受け入れていた若い国語教師が召集されて、その送別会のかえり、思ひつめたような「校長先生……」という呼びかけで呼びかけられたとき完全にへたばつてしまつた。彼はそのときも僕の説を認めていた。ただ彼は、「征」を「ゆく」と、このさい、彼のためによませてくれといつた。燈火管制でまつくらな垣根みちをたどりながら、「校長先生……」というよびかけにショックを感じなくなつてゐる僕を僕は認めた。「それだけは勘弁してくれ。」というかわりに僕は彼の乞いを入れた。

僕はこの話が誰かにしたかつた。だれかに聞いてもらつて、その誰かから、むしろ何ものかから、諒解が得たかつた。僕は焼けだされて以来きていたよし子を相手にえらんだ。しかし、実行はしなかつた。サイパンのことは報道されていた。生きてるかも知れぬという希望をもつていたが、三人の子供を並べて立たして、頸の線が斜線になるなど言つてゐる妹にそれはできなかつた。（玉木は確実に死んだことがわかつた。四四年春、蘇満国境からまわされるとき一月ほど東京にいたがよし子も誰も面会はできなかつた。サイパンへは横浜から立つた。そ

の船が小笠原沖でやられ、七百人ほどのうち四百人ほどが救われて改めてサイパンへ渡された。そのなかに玉木はいた。そのうち四人生きのこつてその一人が最近きてくれた。よし子は君を、玉木から聞いて知っているそうだ。よろしくと言っている。彼女はせつせと稼^{かせ}ぐが知れたものだ。どうしたわけか、玉木家は子供三人ともこつちに置いてほとんど援助してくれぬ。本人も考え、僕も苦しいので、今度の上京はよし子の仕事口にも関係していた。あのとおりの玉木は男だった。義理の弟だからではないが、彼は少数のいい出版をした。そう墓に書いてもおかしくはないだろう。このごろ僕はよし子が新聞広告を見るのに気づいた。本屋の広告を丹念に読んで知らぬ顔をして台所口から出て行く。もともと彼女は本屋のことには口出ししなかつたらしい。玉木の召集後は玉木の指図で店を売り、それは食つてしまつた。彼女を特別あつかいしようとは思わぬが、出版が自由になつたため彼女の口おしさは僕は見てやりたいと思う。

しかしまもなくきたグライダー練習開始が最大の失敗だった。国語教師の「征く」以来僕はまいつていた。原因はいろいろにあつたろう。内原^{うちはら}のかえり、君に会つたときほどの元氣はその時分もうなかつた。内原では頑張つた。県にたいしても文部省にたいしても頑張つた。予科練、兵学校の割当てでも前青春防衛のためには猿知恵をしぼることも辞しなかつた。しかし今やまいり、猿知恵の余地もなくなつていた。

ある晴れた日にグライダーが飛ぶことになつた。全部の試験が終つて教官が声をかけた。どんな言葉だったか忘れてしまつた。軍人教官へたいする反感は今まつたくなし、そのときも、すくなくもそれに關しては徹^み塵^{じん}なかつた。ただ彼は、ひとついかげすという意味の言葉を輕いからかう調子で言つた。僕が受けて立つた。それまでに僕は永いことこの男とやり合つていた。教師をしていると、子供たちの前青春が感覺的にいとおしまれてくる。それを取られまいとしてやり合つてきたのだ。いきさつがヒヤカシ言葉に絶對なかつたとは言いきれぬが知れぬ。しかしその時のかぎり、それを根に持つてこの男がそれを言つたのではなかつたし、僕も挑発でそれに乗つたのでは決してなかつた。僕は自然で、多少うろたえつつ教官もごく自然にしたがつた。

僕は飛んだ。大胆に。何と説明しようか。僕は死にたかつたのだ。死のうと思つたのではない。死を恐れなかつたのだ。恐れなかつたというのが、じつは無知識からもきていたのだが。飛びながら僕は全くとしかつた。雲、丘、河原、すべて色が美しかつた。ええい、飛べ、突つこめ、(そしていうならば死ぬ)……一種の放蕩だ。悲壯ぬき、責任まつたくぬきで上の空で僕は飛んだ。ひどい結果が来た。生徒たちが無言で昂奮して行つた。しんとした彼らの昂奮が眼のなかで乾いてくるほど僕へ吹きつけた。玉碎精神、いまでは誰もつかぬこの言葉のかさかさした音が僕に疼いてひびく。彼らの小さい肉体、手のひらをくぼめて受けられるほどのたましい、その完全な染め。かてて加えて長女が豊橋の海軍工場へどうしても行くと言いだしてとめることができなかった。

未練、未練。とめどなく僕は未練がましくなる。その証拠にこれを書留で出す。よし子のことで役場だ、留守業務局だ(なぜただ留守局とせぬのだらう。)とさんざんやつた挙句、僕はハガキ一枚でも書留で出すことにした。はじめ局の娘たちが、不思議がつて見た。ハガキまで書留にする中学校の校長。半年來(はんねんらい)彼らは笑いかみころさなくなつた。かわりに不愉快な目、わざと厄介をかけるやつという顔をする。輕蔑、小さい憎惡、低能者にたいする寛大な憐憫。それ以上娘たちを刺戟せぬことで僕は満足する。僕の長女のほうが彼女たちより年上なのだ。東京も遠くなり、旅行もつくづく重荷になつた。何彼(なにか)につけて年を考へるようにもなつた。笑われるか知れぬが、笑わば笑え、おのれの年で誰は何をした、だれはどんな地位にいたなどということが頭へ来てかなわぬ。それも誰々が偉大なやつでもあればだが。

しかし無論、未練は未練だ。どうぞして未練から解放されたい。僕は決心をする決心をした。そこで君に相談しよう、議論しようというので訪ねたわけだ。今夜は憲法特配の残りを五勺飲んだ。そして酔つた。もともと僕は酒好きではなかつた。学生時代君らと飲んでも格別うまいとも思はず、酒が飲みたいともさほど思わなかつた。いまは飲みたい。じつに酒が飲みたい。「破戒」に出てくるよぼよぼのやくざ教師、あれが酒の香をかぐところがあつてわからなかつたが今やシンパシーでわかる。銚子(ちやうし)の口の上へんを迷うすぐ消える湯気みたような

もの。あれを鼻で吸うと、微粒子のようなのが粘膜へくる。それがしびれるほど誘惑的だ。全くよぼよぼのやぐざ教師だ。このやぐざ教師は按摩あんまの味を覚えた。按摩がないときは末の子供に背なかを踏ませる。それで足りぬで灸きゅうをすえようと思うことさえある。酒を飲むとも飲まれるなというのの反対、飲みたいという欲望だ。教師生活、戦争生活、最初の妻の死、再婚、大きくなる子供たち、玉木の死と、よし子の、出もどりでなく、何というか、肩も腰も石をみたようになり、そして一ぱいの酒が飲みたい。訴えようのない、年齢からもくる全く日常的散文のないぶせさ、とかく一ぱい飲んで、とかく寝てしまいたい。酒飲みには別の飲み方があるか知れぬが、僕はそうだ。職責(?)がら国民酒場の行列には立たぬが、ああして並んで、恥も外聞も忘れたように待つている人生の敗残者といった人たちに面をそむけて僕は同情する。僕はこのごろ子供ころの在郷歌ざいじょうかを思い出した。童謡だ。「雀すずめ、なしてそこにとまでだ。腹コすぎで(腹がすいてだ)とまでだ。腹コすぎだら田つくれ。田つくればよごれる。よごれだら洗え。洗えば流れる。流れだら葦の葉にとまれ。とまれば手きれる。手きれだら麦の粉をふりかけれ。振りかければ蠅とまる。蠅とまつたらあうげ。あうげばさびよ(寒いよだ)。さびがらあだれ。あだればあづいよ(火にあたれば熱いだ)。あづがらひつこめ。ひつこめばとぜね(とぜね、さびしいだ)。……ひつこめばとぜね。とぜねがら(さびしけれや)酒飲め。酒飲めば酔う。酔つたら寝れ。寝れば鼠にひかれる。起きればお鷹にさらわれる。」だ。だれがこの文句をつくつただろう。とぜねがら酒飲め。さびしければ酒飲め。酔つたら寝れ。つまりこれは、日本の「家」いえを歌つたものだろうか。僕は末の子を溺愛しているがこれは二度目の妻の子だ。二度目の妻は、まだいわなかつたが最初のの妹だ。最初のが娘ふたりおいて死に、実の妹と再婚した僕は子供を避けてきた。しかし出来たとわかつたときは男をほしいのと男であつてくれねばいいがということとで挟まれて悩んだ。しあわせと女が生まれ、男であつてくれたらと思う一方、女で大つびらに溺愛できて助かつてきた。そしてやつとこのごろそれを妻に語ることができた。妻を愛せよ。二度目の妻をわけても愛せよ。一度目の妻、その子供、二度目の妻、その子供、それから父、うちそろつて最初の妻の記憶がなつかしく語りあ

えねばならぬ。あわれな父、あわれな母、それをしよいこまされるあわれな子供たち。とぜねがら酒飲め。君のところではどうか。僕はこのごろ、日本の女という女がつけている、足の甲の、くるぶしのすぐ下の坐りだこ、あのあざのような皮膚の部分に眼をはなれぬ。年ごろになるまであんなものはない。嫁入り支度、そこでそろそろ出来、結婚、母親、それで完成する。最初の妻にもあつた。いまの妻にもある。娘たちにはまだない。僕は娘たちにはあんなものを出かせたくない。それだけ妻の足の坐りだこを撫でてやりたいよ。すべて日本の女の足の坐りだこを撫でてやりたいよ。日本の女の取りあつめたあわれさ、たこ。そして女という女の足に坐りだこをつくるものの男への反射が酒を求めさせる。ただ、末の子のことで語り合つたため僕は新しい境地へ来られたようだ。これはたいしたことだつた。これ以上生まれるはずもないが、仮りに今後男が生まれるとしても僕はらくに愛せそうに思う。とぜねがら酒飲め。酔つたら寝れ。その年にかけて、僕らは、坐りだこの出来た妻を新しく愛せねばならぬのだ。妻への不満、夫への不満、それを思い捨てるべきでないのだ。女で四十すぎ、男は五十七ちかくなつて、孫を生むほどになつて、尾骶骨びていこの下びていこのくぼんで皺になつた皮膚がうすぎたなく黒ずんできて、そのときになつてあらためて求め求むべきなのだ。

そこでききたいが、僕の学校にも青年共産同盟が出来た。だいぶまえに出来た。見ていて僕が気がもめてならぬ。まずこんなことがあつた。共産党が合法になり、天皇制議論がはじまると、中学生がいきなり賢くなつた。頭のわるくない質朴な生徒、それが戦争ちゆう頭がわるかつた。それがよくなつてきた。ちく、ちく、針がもう一度うごきだしてきた。中ぐらいの子供が、成績があがるのちがつて賢くなつた。ある日クラス自治会をつくることで教師生徒、議論になつたことがあつた。そして衝突した。生徒は自治会は自治的につくらねばならぬ、先生は入れぬ形にせねばならぬと言ひはつた。教師は、それはいかぬ、監督の責任上入れてもらわねばならぬと言ひはつた。生徒は、それは教師が各クラス自治会の常任議長になることだ、教師連合が自治会を指導しようというのだという。教師は、自治会を圧迫する気は毛頭もうとうない、しかし指導・監督の責任はどこまでも負わねばなら

ぬという。とど教師側でおこつてしまつた。それは責任を負うことの拒否だ。責任を放棄するのがどこが民主主義だといわれて生徒側がへこんだ。教師側に圧迫する気がなかつたことは事実だ。ただ判断は僕にできなかつた。僕に気づいたのは、腹を立てたのが教師側だつたこと、腹を立てなかつたのが生徒側だつた新しい事実だ。教師側は立腹して、生徒を言いまくり、やりつけた。この点になると教師側は一致していた。生徒側はばらばらだつた。ただ彼らは、腹を立てずに、監督の責任が別の形で負えることを教師たちに説明した。特に非秀才型の生徒が、どうしたら教師側にうまくのみこませられるか手さぐりで話して行つたのが目立つた。教師側が大ごえになるほど、彼らが、それはそうじゃない、先生が圧迫しようとしているとは取つていない、そうじゃない、そうじやなくてと、子供頭をふりふり、全体として受け身で攻撃を受けとめていたのが目立つた。教師団が駄々つ子になつて、教師・生徒がすっかり位置を顛倒してしまつていた。僕はヌエ的司会者として、もつぱら教師たちのために生徒側をなだめた。教師側をなだめたというのがいつそう正しいだろう。教師もはいれる折衷案が出来てケリはついた。

ただ僕はこんなことではじまつた生徒の活動が、その後停滞してきたように見えるのが気になるのだ。停滞してるように僕に見える。生徒たちが、賢くなりかけたまま中途半端な形になつてきたというのが僕の気のもめる観察だ。僕は圧迫ということも考えてみた。適度に圧迫することでかえつて彼らが伸びるだろう。むろん僕は、あまりに教師・校長くさいのに気づいて苦笑したがやつと原因がわかつてきた。とかく共産党がわるいのだ。先きへ先きへと指導せぬのがわるい。

僕はあの日、君のところへ、抗議でないまでもそれに近い気持ちからも駆けつけていた。僕は午後の祭をみていたのだ。そして君の顔もみたく、ほかに行き場もなくして君のところへ出かけたのだつたが、あれはどれくらい集まつていたろうか。新聞には十万とあつたが、記事そのままで嘘はなかつた。僕はおのぼりだからリュックをかついでうしろにいた。天皇が来て、帽子を取らぬものもいたが、僕は取つた。天皇が台へのぼつて帽を取つた。